

発話への注目・工夫について

—吃音治療の基準の検討—

宮本昌子 都筑澄夫

(Shoko MIYAMOTO Sumio TSUZUKI)

【要約】

本研究では、大学生139名（18歳～38歳）に対し、発話時に行う発話への注目・工夫に関する全35項目の調査を実施した。調査の結果、吃音のない者が128名、吃音のある者（過去にあった者も含む）が11名で、吃音のない群においても、発話への注目・工夫について尋ねた全27項目について該当しているとの回答がみられた（6～72名）。吃音のある群との比較において、全項目において吃音のある群が、より高い割合で注目や工夫をしている結果であったが、有意差がみられたのは2項目のみであった。吃音に独特な症状に関する質問についても、吃音のない者の半数が該当すると回答しており、項目の文脈の解釈により、高い割合が示された可能性がある。今後は、項目の表現についての検討が必要である。

キーワード：吃音、治療、発話への注目、工夫

1. はじめに

吃音の治療方法は大きく、直接法と間接法に分けられる。直接法に該当する「流暢性促進法」や「随意吃」は、発話症状を意図的に制御する方法であり、現在の吃音治療で多く使われる技法である¹⁾。都筑はこれらの方法について、本人の満足のいく流暢なレベルに到達することはあるとしても、話者が流暢に話すための技術に依存することが問題で、自分の発話に対して自信を持つことが難しくなることを指摘する²⁾。都筑はさらに、そのために効果が日常生活に般化しづらい点や持続しにくく、本来の治療には到達することが困難になることを危惧している¹⁾。

吃音の治療については、多面的な評価が必要であると考えられているが、現状では表面化した吃音症状の生起頻度の低下や本人の報告などの評価方法が主流である。しかし、日本音声言語医学会吃音検査法小委員会作成の「吃音検査法〈試案1〉」（1981）³⁾の吃音の進展段階第4層に至ると、吃音に対する強い否定的な情緒性反応が生起する⁴⁾。一方、吃音の症状は本人の工夫や、苦手な音を避けるための語の置き換え等によ

り、外に現れにくくなる。このように、外的に症状が生起しないことを改善や治療とすることは、本人の生活のしやすさから考えると非常に低い満足度のままにあることが懸念され、治療の定義や基準が明確でないことが、吃音の治療においても問題である。

吃音の治療を受ける者にとっても、症状を表面化させないことについて、自分のコミュニケーション上の問題が改善したと考える場合はあるであろうが、自分は流暢な発話のために工夫、あるいは技術を使っているため、吃音者としての自覚を持ち続ける場合もある⁵⁾。

そこで、筆者らは、非吃音者は発話のために努力や工夫をせず、自然な状態で話していることを仮説化し、項目化することで、吃音の改善の尺度が明確になるのではないかと考えた。自然な発話とは、発話への注目をせず、意図的な操作がないという意味であり、普段の生活の中で友人と話したりする場合に、発話前・中・後を通して意識、工夫をしていないことを指す。

本研究では、言語聴覚障害学を専攻する大学生を対象とし、自分の発話に対する意識や工夫に関する調査

を行い、流暢な話者が日常生活の会話で行う、発話への注目や意図的な操作の有無について、生起の割合を示すことを目的とする。

また、吃音の有病率は一般的に人口の1%程度と報告されているため⁶⁾、本研究の対象の中に吃音のある者、あるいは過去にみられた者が含まれる可能性が高い。よって、吃音のある者となない者（過去にみられた者も含む）に分類し、生起の割合を比較することで、吃音のある者となない者の発話への意識や工夫の仕方についての検討を加えたいと考える。

2. 方法

1) 対象

大学生150名（本学保健医療学部言語聴覚学科1～3年生127名、他大学で言語聴覚障害学を専攻する3年生23名）に対し、研究の主旨を説明し、同意が得られた139名（男子22名、女子117名）に質問用紙への回答を依頼した。

なお、本研究は目白大学倫理審査委員会の承認を得て行った。

2) 調査期間

平成20年5月～8月

3) 質問紙の内容

本調査は「発話への注目、工夫」について明らかにすることを目的とし、Ⅰ. 普段の生活の中で、友達と話している場面の行動について、Ⅱ. 流暢に話すために普段行っていることについて、Ⅲ. 吃音歴について（現在、あるいは過去の吃音の経験の有無に関する質問）の3領域から成る（表1）。Ⅰの下位項目として1. 発話への注目について8項目、2. 発話の工夫が19項目（発話の直前について4項目、発話中について15項目）、Ⅱ・Ⅲには各4項目が含まれ、計35項目で構成された。全ての質問項目（Ⅱ④、Ⅲ①の年齢・性別を記入する以外）は、「はい」「いいえ」いずれかの選択で回答を求めた。

Ⅰ・Ⅱの項目内容とし、吃音の進展段階第4層以降の者が持つ、吃音が起こるのではないかという予期不安に伴い生起しやすい行動を集めた。都筑が作成した「吃音の訓練・治療法の比較」²⁾で用いられた指標を参考に、筆者らが作成したものである。

4) 分析方法

質問紙のⅢの回答から、「現在も過去も吃音を経験していない者（「吃音なし群」とする）」、「現在、あるいは過去に吃音を経験した者（「吃音あり群」とする）」に分類した。Ⅰ・Ⅱの各項目について「はい」と答えた人数の割合を比較した。

上記2群間で、各項目の「はい」と「いいえ」の回答率の相違を検討するため、 χ^2 検定を用いて比較した。統計処理にはSPSS（Ver. 18.0）を使用した。

3. 結果

1) 対象者の構成

回答が得られた139名（男子22名、女子117名）は、18歳～38歳（男子：18歳～21歳、女子：18歳～38歳）であった（表2）。

また、「吃音なし群」に128名、「吃音あり群」に11名が該当した（表2）。「吃音あり群」の内訳では、現在、吃音症状がある者が7名（男子3名、女子4名）、現在は吃音症状はみられないが過去に吃音を経験したことがある者が4名（女子のみ）であった。

2) 吃音なし群の「発話への注目・工夫」について

「吃音なし群」128名の、発話への注目・工夫に関する全30項目について、「はい」と回答した数と割合を表3に示した。全ての項目において「はい」の回答があった（2名（1.6%）～72名（56.3%））。最も多く「はい」に回答した項目Ⅰ2（2）⑧は「発話中、言いにくい時、言いやすい言葉に言い換える」であった。次に項目Ⅰ2（2）①「発話中、つまると言い換える」（66名、51.6%）、項目Ⅰ2（2）②「流暢に話すため、意図的にゆっくり話す」（64名、50.0%）、項目Ⅰ2（2）③「言葉が出にくい時、言うのを一旦やめ、やり直す」（64名、50.0%）の順であった。

一方、より少数の回答率を示したのは、項目Ⅱ③「①②の他に、流暢に話すために普段行っていることがある」（2名、1.6%）、項目Ⅰ2（2）⑩「発話中に舌、口、呼吸器官の動きを意識的に行う」（6名、4.7%）、Ⅰ1①「発話前、語音に注目する」（8名、6.3%）、Ⅱ①「流暢に話すために誰も居ないところで練習する」（8名、6.3%）であった。

3) 吃音あり群の「発話への注目・工夫」について

2)と同様に、「吃音あり群」11名の結果を表4に

表1 調査項目

I. 普段の生活の中で友達と話している場面について

1. 発話への注目 ① 発話前に語音に注目していますか。

- ② 発話前に言葉に注目していますか。
- ③ 発話前に、言える・言えないを判断していますか。
- ④ 発話前に自分の身体の緊張状態に注意が向きますか。
- ⑤ 発話前、または発話中に口、舌の状態に注意が向きますか。
- ⑥ 発話中に自分の身体の状態を意識していますか。
- ⑦ 発話後、音がうまく出たかどうかを意識していますか。
- ⑧ 発話後、うまく言えた・言えなかったかを分析しますか。

2. 発話の工夫

(1) 発話直前

- ① 発話前に、頭の中で言えるかどうか言ってみることがありますか。
- ② 発話前に、言えそうな言葉は他の言葉に言い換えますか。
- ③ 発話前に自分の身体の緊張をほぐしたり深呼吸をしますか。
- ④ 話す前に口を少し動かして言いやすくすることがありますか。

(2) 発話中

- ① 発話中につまると言葉を言い換えますか。
- ② 流暢に話すため、意図的にゆっくりと話すことがありますか。
- ③ 最初の言葉がつまって出にくいとき、言うのを一旦やめ、やり直すことがありますか。
- ④ 話しやすくするために「あの一」、「えーと」、「まー」などの言葉を意識的に入れますか。
- ⑤ 言いやすいように、リズムを取ることがありますか。
- ⑥ 言葉がつまって出ないときは勢いをつけますか。
- ⑦ 言葉がつまって出にくいとき、言うのを一旦やめ、後回しにすることがありますか。
- ⑧ 話す途中で言いにくくなった時、自分の言いやすい言葉に言い換えますか。
- ⑨ 言いにくい音は、自分なりに音を変えて発音したりしますか。
- ⑩ 発話中に、姿勢を変えて言い易い体勢を取ろうとしますか。
- ⑪ 発話中に舌、口、呼吸器官の動きを意識的に行おうとしますか。
- ⑫ 言いにくい時に咳払いをしてごまかしますか。
- ⑬ 口を大きく開けて話そうとしますか。
- ⑭ 言葉がいいづらい時に、分からないふりをしますか。
- ⑮ 自分からはなるべく話さず、相手の言葉を利用して返事だけで済ませることがありますか。

II. 流暢に話すために普段行っていることについて

- ① 誰も居ないところで発話の練習をしますか。
- ② 一人で音読の練習をすることがありますか。
- ③ その他、自分で行っていることがありますか
- ④ ③で「はい」と答えた場合、具体的に記入して下さい。

III. あなた自身について差しかえなければお答えください。

- ① あなたの年齢と性別を記入して下さい。
- ② 現在、あなたには吃症状がありますか。あるいは吃音者だという自覚がありますか。
- ③ ①で「いいえ」と答えた方への質問です。過去に吃っていた時期がありますか。
- ④ ②で「はい」と答えた方への質問です。現在は、その吃音は治っていると思いますか。あるいは、構音障害（ある音が出ない、ろれつが回らないなど）がありますか。

示した。全ての項目において「はい」の回答があった（1名（9.1%）～10名（90.9%））。しかし、11名全員が該当すると回答した項目はなかった。

最も多く「はい」に回答した項目 I 2 (2) ⑧は「吃音あり群」の結果と同じで「発話中、言いにくい時、言いやすい言葉に言い換える」であった。続いて、項目 I 2 (1) ②「発話前、言えそうもない言葉は他の言葉に言い換える」、項目 I 2 (2) ①「発話中、言えそうもない言葉は他の言葉に言い換える」、項目 I 2 (2) ③「最初の言葉がつまって出にくい時、言うのをやめる」（9名、81.8%）であった。

一方、より少数の回答率を示したのは、項目 II ①「誰も居ないところで発話の練習をする」（1名、9.1%）、項目 I 1 ①「発話前、語音に注目する」、項目 I 2 (2) ⑩「発話中に舌、口、呼吸器官の動きを意識的に行う」、項目 I 2 (2) ⑬「口を大きく開けて話そうとする」、「項目 II ②「一人で音読の練習をすることがある」（2名、18.2%）であった。

4) 「吃音なし群」と「吃音あり群」の比較

2)・3) で示した結果を併せ、図1に示した。「吃音あり群」と「吃音なし群」の I と II の各質問における「はい」と回答した比率（%）を比較した結果である。横軸は I と II の質問項目番号を示す。図1からは、「吃音なし群」と比較し、「吃音あり群」が各項目に該当した割合が高いことが分かる。II の3項目については両群ともに「はい」の割合が低い結果であった。

また、I・II の全項目について、2群間の「はい」の回答の割合を比較し、統計処理を行った結果、項目 I 2 (2) ⑥「言葉がつまって出ないときは勢いをつける」には吃音あり群の方が有意に高い割合で、「はい」に回答していた（ $\chi^2 = 13.24, p < 0.05$ ）。項目 I 2

(2) ⑩「発話中に言いやすい体勢を取ろうとする」についても、同様であった（ $\chi^2 = 15.86, p < 0.01$ ）（図2、図3）。

4. 考察

1) 吃音のない話者の発話への意識、工夫

本研究では、吃音のない話者は、発話前・発話中いずれも自分の話し言葉や発声発語器官に対する意識を持たないのではないかと、ということ仮説化し検討を行った。結果は、流暢な話者においても、吃音の者に特有であると考えられる発話への注目、工夫をする者が一定の割合で存在する可能性が示唆された。

吃音症状を有する話者（過去に吃音を経験した者も含む）との比較では、2項目について有意に低い比率であることが分かった。しかし、今回の研究では一般の大学生を研究対象としており、流暢な話者に対する吃音の群を設定していなかったため、両群の人数が統制できていない。吃音がある群の人数を増やして検討する必要があると思われる。

また、本研究で作成した質問紙は、吃音のある者を評価する際に用いられる指標を基準としており、流暢な話者にとっては具体的なイメージが湧きにくい表現であった可能性がある。あるいは、吃音のある者が該当する行動とは別の意味で捉えた項目もあることが推測される。例えば「発話前に、言えそうもない言葉は他の言葉に言い換えますか」という項目内容は、吃音がある者にとっては、吃音を回避するための「工夫」という症状に一致させて考えることが容易であろう。吃音のある者にとって「他の言葉への言い換え」は、症状の一つである、吃音症状の出現を恐れ、不安を感じた上取る行動であるというような認識や自覚があるからである。一方、流暢な話者は、恐れや不安を持

表2 回答から分類された吃音なし群・あり群における年齢別の内訳（人数）

年齢	吃音なし		吃音あり	
	女子	男子	女子	男子
18歳	20	4	1	2
19歳	35	9	4	1
20歳	43	2	2	
21歳	6	4		
22歳	3			
24歳以上	2		1	
	109	19	8	3

表3 各質問項目において「該当する」と回答した数（吃音のみられない群：N = 128）

I. 普段の会話場面について	女子 (N=109)		男子 (N=19)		合計 (N=128)	
	回答数	(%)	回答数	(%)	回答数	(%)
1. 発話への注目						
① 発話前：語音への注目	6	5.5	2	10.5	8	6.3
② 発話前：言葉への注目	26	23.9	6	31.6	32	25.0
③ 発話前：言える・言えないの判断	20	18.3	4	21.1	24	18.8
④ 発話前：自分の身体の緊張状態への注意	15	13.8	7	36.8	22	17.2
⑤ 発話前または発話中：口、舌の状態への注意	13	11.9	1	5.3	14	10.9
⑥ 発話中：自分の身体の状態への意識	13	11.9	2	10.5	15	11.7
⑦ 発話後：音がうまく出たかどうかの意識	32	29.4	6	31.6	38	29.7
⑧ 発話後：うまく言えた・言えなかったかの分析	40	36.7	4	21.1	44	34.4
2. 発話の工夫						
(1) 発話直前						
① 発話前：頭の中で言えるかどうか言ってみる	47	43.1	9	47.4	56	43.8
② 発話前：他の言葉への言い換え	43	39.4	10	52.6	53	41.4
③ 発話前：身体の緊張をほぐす	11	10.1	3	15.8	14	10.9
④ 話す前：口を少し動かして言いやすくする	21	19.3	5	26.3	26	20.3
(2) 発話中						
① 発話中：つまると言い換える	56	51.4	10	52.6	66	51.6
② 流暢に話すため、意図的にゆっくりと話す	56	51.4	8	42.1	64	50.0
③ 言葉が出にくい時、言うのを一旦やめ、やり直す	55	50.5	9	47.4	64	50.0
④ 「あー」「えーと」などの言葉を意識的に入れる	43	39.4	6	31.6	49	38.3
⑤ 言いやすいように、リズムを取る	29	26.6	5	26.3	34	26.6
⑥ 言葉がつまって出ないときは勢いをつける	18	16.5	4	21.1	22	17.2
⑦ 言葉が出にくい時、言うのをやめ、後回しにする	34	31.2	7	36.8	41	32.0
⑧ 言いにくい時、言いやすい言葉に言い換える	62	56.9	10	52.6	72	56.3
⑨ 言いにくい音は、音を変えて発音する	23	21.1	7	36.8	30	23.4
⑩ 発話中に言い易い体勢を取ろうとしますか。	13	11.9	6	31.6	19	14.8
⑪ 発話中に舌、口、呼吸器官の動きを意識的に行う	5	4.6	1	5.3	6	4.7
⑫ 言いにくい時に咳払いをしてごまかす	15	13.8	4	21.1	19	14.8
⑬ 口を大きく開けて話そうとする	17	15.6	2	10.5	19	14.8
⑭ 言葉がいいづらい時に、分からないふりをする	17	15.6	4	21.1	21	16.4
⑮ 相手の言葉を利用して返事だけで済ませる	25	22.9	8	42.1	33	25.8
II. 流暢に話すために普段行っていること						
① 誰も居ないところで発話の練習をする	5	4.6	3	15.8	8	6.3
② 一人で音読の練習をすることがある	17	15.6	3	15.8	20	15.6
③ その他、自分で行っていることがある	1	0.9	1	5.3	2	1.6

表4 各質問項目において「該当する」と回答した数（現在あるいは過去に吃音のある群：N = 11）

I. 普段の会話場面について	女子 (N=8)		男子 (N=3)		合計 (N=11)	
	回答数	(%)	回答数	(%)	回答数	(%)
1. 発話への注目						
① 発話前：語音への注目	2	25.0	0	0.0	2	18.2
② 発話前：言葉への注目	5	62.5	1	33.3	6	54.5
③ 発話前：言える・言えないの判断	4	50.0	1	33.3	5	45.5
④ 発話前：自分の身体の緊張状態への注意	4	50.0	2	66.7	6	54.5
⑤ 発話前または発話中：口、舌の状態への注意	7	87.5	0	0.0	7	63.6
⑥ 発話中：自分の身体の状態への意識	4	50.0	1	33.3	5	45.5
⑦ 発話後：音がうまく出たかどうかの意識	4	50.0	3	100.0	7	63.6
⑧ 発話後：うまく言えた・言えなかったかの分析	5	62.5	2	66.7	7	63.6
2. 発話の工夫						
(1) 発話直前						
① 発話前：頭の中で言えるかどうか言ってみる	5	62.5	2	66.7	7	63.6
② 発話前：他の言葉への言い換え	6	75.0	3	100.0	9	81.8
③ 発話前：身体の緊張をほぐす	3	37.5	1	33.3	4	36.4
④ 話す前：口を少し動かして言いやすくする	5	62.5	1	33.3	6	54.5
(2) 発話中						
① 発話中：つまると言い換える	6	75.0	3	100.0	9	81.8
② 流暢に話すため、意図的にゆっくりと話す	6	75.0	2	66.7	8	72.7
③ 言葉が出にくい時、言うのを一旦やめ、やり直す	7	87.5	2	66.7	9	81.8
④ 「あの一」「えーと」などの言葉を意識的に入れる	7	87.5	1	33.3	8	72.7
⑤ 言いやすいように、リズムを取る	3	37.5	0	0.0	5	45.5
⑥ 言葉がつまって出ないときは勢いをつける	5	62.5	2	66.7	7	63.6
⑦ 言葉が出にくい時、言うのをやめ、後回しにする	5	62.5	2	66.7	7	63.6
⑧ 言いにくい時、言いやすい言葉に言い換える	8	100.0	2	66.7	10	90.9
⑨ 言いにくい音は、音を変えて発音する	6	75.0	1	33.3	7	63.6
⑩ 発話中に言い易い体勢を取ろうとしますか。	4	50.0	3	100.0	7	63.6
⑪ 発話中に舌、口、呼吸器官の動きを意識的に行う	1	12.5	1	33.3	2	18.2
⑫ 言いにくい時に咳払いをしてみますか	2	25.0	1	33.3	3	27.3
⑬ 口を大きく開けて話そうとする	1	12.5	1	33.3	2	18.2
⑭ 言葉がいいづらい時に、分からないふりをする	5	62.5	1	33.3	6	54.5
⑮ 相手の言葉を利用して返事だけで済ませる	4	50.0	3	100.0	7	63.6
II. 流暢に話すために普段行っていること						
① 誰も居ないところで発話の練習をする	0	0.0	1	33.3	1	9.1
② 一人で音読の練習をすることがある	1	12.5	1	33.3	2	18.2
③ その他、自分で行っていることがある	1	12.5	0	0.0	1	9.1

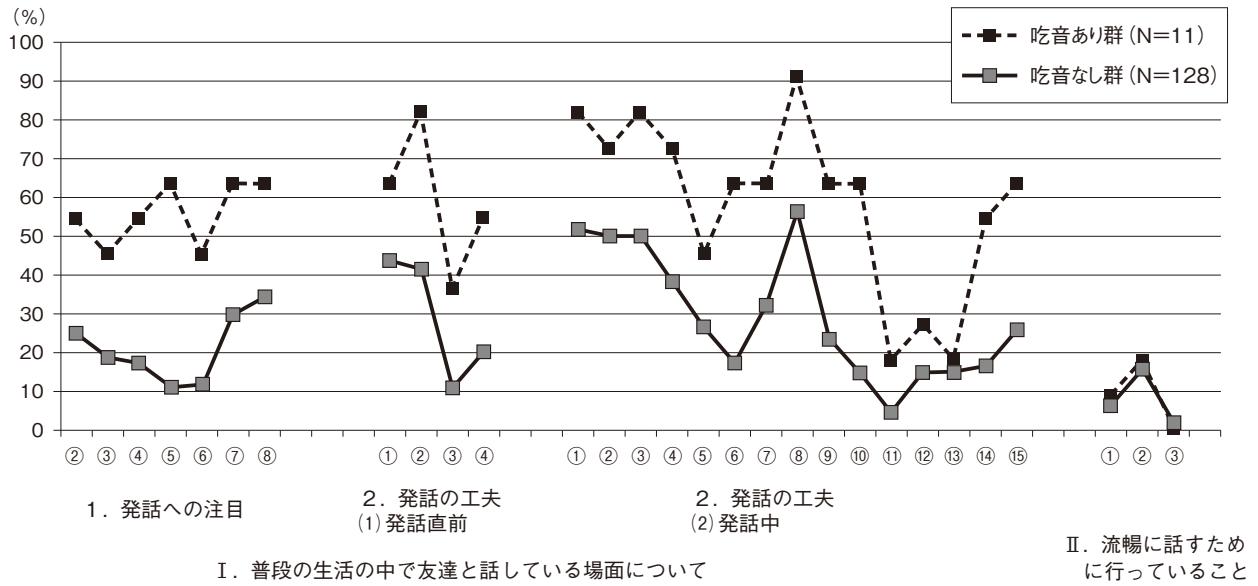


図1 吃音あり群となし群の各質問項目に該当した割合の比較

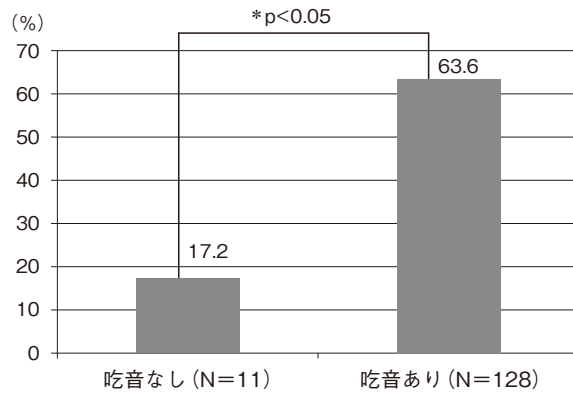


図2 「発話中に言葉がつまって出ない時はずみをつける」に該当した割合の比較

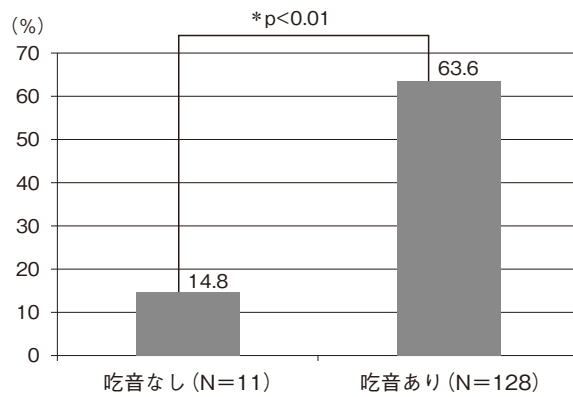


図3 「発話中に言い易い体勢をとろうとする」に該当した割合の比較

つほどに至らない段階で言い換えることも含めて解釈する可能性がある。このように、質問紙の項目内容の表現が、流暢な話者には解釈しづらい点があり、それらを修正することにより、結果が変わる可能性があると考えられる。

流暢に話すために普段行っていることについての記述回答には、吃音ではない話者であっても、「気持ちが高ぶると吃りやすくなるため、気をつけている」という例があった。また、音読の練習、発話の練習をする者もいることから、吃音ではなくても、自分の話し言葉について注目し、気にかける、心配するなど、吃音のある者が意識するのに近い状態を経験する可能性があることが分かった。しかし、対象が言語聴覚障害を専攻している学生であり、自分の言葉に注意を向ける習慣のある者がより多く含まれる要因が結果に影響したとも考えられる。

2) 吃音のある話者の発話への意識、工夫

本研究で、現在吃音がある、あるいは過去に吃音があったと回答した者11名については、仮説のとおり自分の発話への注目や工夫をしていた。発話への意識や工夫に関する項目に該当した割合の比較では、吃音のない群より多い傾向がみられたが、統計的に有意差があったのは2項目のみであった。2項目の内容は、「言葉がつまって出ない時にはずみをつける」、「発話中に姿勢を変えて言い易い体勢を取ろうとする」であった。この2項目の結果は、吃音のある者に特有な意識や工夫の仕方の自覚が回答に反映したと考えられる。前者は「吃音検査法〈試案I〉について」で示された吃音症状分類（日本音声言語医学会、吃音検査法小委員会、1981）³⁾に含まれる「助走（starter）」、後者は「随伴症状（associated symptom）」の体幹の運動に該当する。一方、うまく言えないのではないかと判断し、別の言葉に言い換えることは、同分類で「回避（avoidance）」という症状にあたるが、本研究では、吃音のない群においても「回避（avoidance）」に該当する工夫をするという回答が半数くらいにみられていた。「回避（avoidance）」は吃音のある者にとっては、吃音が生じしそうな音や単語を避けて別の言葉に言い換える症状で、吃音の進展に関わる重要な症状であると言われる。「回避（avoidance）」により、表面的には吃音頻度が下がったように周囲の者には見えても、本人の中では言えなかったという感情が鬱積し、益々吃

音の悪化が進むという悪循環へ進展するためである。「回避（avoidance）」の有無を尋ねた項目が、吃音のない者においても多く該当した点は、項目の表現に拠ると考えられる。「言葉が出にくい時…」という表現は吃音のある者にとっては、よくあることであろうが、非吃音者にとっては想定し難いことであり、音が出にくいというよりは、語想起の困難さを思い浮かべる者が多かったのではないかと推測する。

3) 発話への意識・工夫を吃音の改善・治癒の指標とすることについて

上記のことから、発話への意識や工夫に関する項目を吃音改善の尺度にすることは、現在の項目のままでは難しいことが分かった。一部の項目については吃音のある者、ない者の比較で有意差がみられたことから、項目の精度を高めることで今後、評価基準になり得ることが予想される。吃音のない者が、どれくらい少ない努力で自然に行っているかということについて尺度化し、より適切に表現された項目を設定することで、症状が表面化しない吃音の者についても、吃音の評価が可能な指標を作成することが可能になると考える。また今回は、過去に吃音症状がみられた者で、調査の時点で吃音症状のある話者とない話者を分類せずに分析を行ったが、分類を行った上で検討することにより、吃音の改善・治癒の指標が得られやすくなるのではないかと考えた。

4) 今後の課題

本研究では、吃音のない者も自分の発話への意識や工夫をしているという結果にはなったが、本来は吃音のある者に特有な症状の有無に対しても半数の回答があったことから、項目の表現に改善の余地があると考えられる。また、対象が言語聴覚障害学専攻の学生であったことが結果に影響している可能性があり、医療や語学以外の分野の学生を対象に同研究を実施することで、より一般的な話者に近い対象のデータが得られるのではないかと考えられる。

さらに、本研究では、吃音のない群に対して、吃音のある群の人数が少なく、比較を行うのには適切な数ではなかったことが懸念される。今後は、吃音のある群の人数を増やし、対象者数を調整した上で検討を重ねたい。

5. 結語

1. 吃音のない者でも、自分の発話に対する注意や工夫をしていた。
2. 吃音のある者は、吃音のない者と比較して、発話の際にはずみをつける、姿勢を変えるという点で、特殊な工夫をしていた。
3. 本調査で使用した質問紙の項目の表現には、一般の話者にとってイメージしづらい表記が含まれ、修正が必要である。

謝辞

本研究にご協力いただきました言語聴覚障害学を専攻する学生の皆さまに心から感謝致します。

【文献】

- 1) Guitar, B., : Preliminaries to Assessment. Stuttering: An Integrated Approach to Its Nature and Treatment (Guitar, B., Ed.). 173-216, Third Edition (2006)
- 2) 都筑澄夫：指導・訓練法. 言語聴覚療法シリーズ13 吃音 (第7刷). 26-32, 建帛社 (2007)
- 3) 日本音声言語医学会吃音小委員会 森山晴之, 小沢恵美他：吃音検査法〈試案1〉について. 音声言語医学 22 巻2号, 194-208 (1981)
- 4) 都筑澄夫：吃音とは何か. 言語聴覚療法シリーズ13改訂吃音. 8-22, 建帛社 (2008)
- 5) 功刀武・畦上恭彦・小林宏明・早坂菊子：Hidden Stuttererと診断された大学生の心理的変容過程. 日本特殊教育学会第33回大会発表論文集. 634-635 (1997)
- 6) Andrews, G., Craig, A., Feyer, A.-M., Hoddinott, S., Howeie, P. M., & Neilson, M.D : Stuttering. A review of research findings and theories circa. Journal of Speech and Hearing Disorders 48, 226-246(1983)

(2011年10月4日受付、2011年11月17日受理)